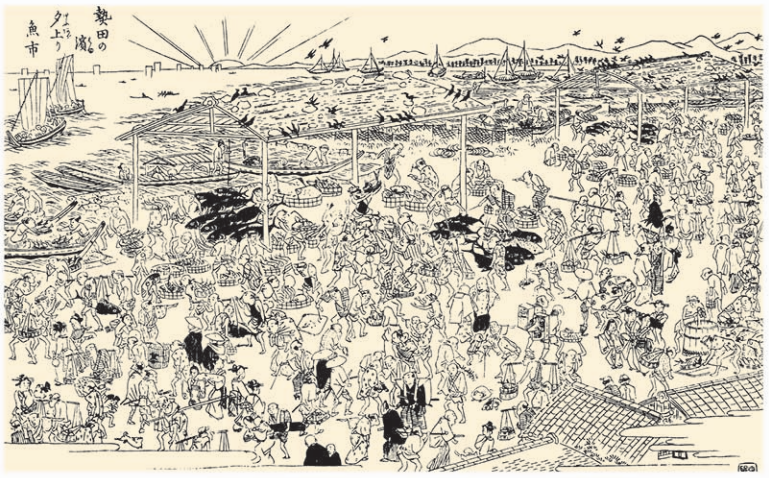
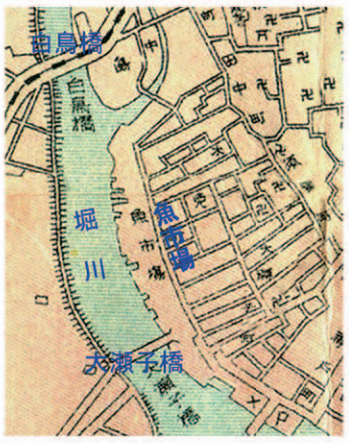
熱田は門前町であり宿場町でもあったが、もう一つの顔が漁師町である。信長が清須にいた頃、すでに魚問屋数軒があって、毎日清須に魚を輸送していたという。


夕上がり魚市　（尾張名所図会）

寛永（1624 ～ 44）の頃になると問屋株が定まり、6軒（8軒とも）の問屋が営業していた。木ノ免浦と大瀬子（現在の堀川東岸）の地域では、毎日朝市と夕市の2回の市が立ち活発に売買が行われていた。伊勢湾で獲れた魚だけでなく、近国遠国からも船で運ばれ、三河の吉田（現：豊橋市）あたりから歩いて運び込まれる荷もあった。多くの魚がすぐに売買され、尾張はもちろんの事、美濃や信濃まで歩いて運ばれていった。魚市は荷物を運搬する人夫がたくさん集まり、たいへんな騒ぎであったという。



熱田魚市場周辺
（名古屋市実測図　明治43年）

明治になっても熱田の漁業は盛んで、15 年には羽城・木ノ免・大瀬子の 300 戸余りが漁業に従事しており、17 年には熱田魚組合が設立され、36 年には漁業法に基づく熱田町漁業組合ができている。東海道線が全通したせいだろうか、明治 23 年刊の『尾張名所図絵』には、「毎朝市を開きて……近年に至りては販路を美濃・飛騨・信濃等の諸国に開き、其市場の盛大なることは全国無比と称せらるるに至れり」と書かれ、全国有数の魚市場に成長していた。

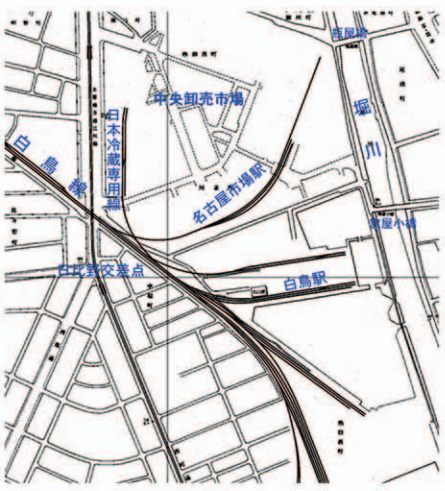
熱田魚市場之景（尾張名所図絵　明治23年）

熱田魚市場（愛知県写真帖　明治43年）

明治 29 年に熱田港（現：名古屋港）の建設が始まり、40 年には海外貿易ができる開港場に指定された。大正 14 年に名古屋港内で漁業をしていた木ノ免町の漁師が違法操業という事で逮捕された。港内での漁業が完全に禁止されては熱田と下之一色の漁師 500 人の死活問題だと、60 人が県に陳情に出かけようと血気にはやっているところを町の総代が駆けつけて収めたということもあった。

熱田の漁業は時代とともに衰退していったが、熱田の魚市場は活発な取引を続け、市内には熱田の他にいくつもの民営魚市場・青物市場が生まれていた。大正7年の米騒動を契機に中央卸売市場法が制定され、翌年名古屋でも計画原案がたてられた。しかし既存の市場関係者からの反対が強く、昭和9年には調査費の追加予算が市会で否決されている。民営から公設市場に変わるきっかけとなったのは、太平洋戦争の物資不足である。昭和 16 年に物資統制令が出され配給制度が強化されていった。それにより魚・青物市場も荷受と配荷を一元化している。17 年になると卸市場予算が市会で可決されて、白鳥貯木場の北に隣接する広い土地に建設される事になった。19 年に建設が始まったが、20 年の空襲で焼失してしまった。戦時下では県食品市場取締規則によって市場を開設していたが、昭和 24 年に中央卸売市場法による中央卸売市場本場が開業した。取り扱うのは水産物・青果物・漬け物である。32 年になると引き込み線が延長されて東海道線名古屋市場駅も設けられ、市場の主要施設は線路に沿って配置された。鉄道により全国各地から荷が運び込まれていたが、トラック輸送の興隆により 53 年 10 月 1 日に駅は廃止されている。

中央卸売市場本場（名古屋市中央卸売市場50年誌　昭和45年）



名古屋市場駅と白鳥駅（国土基本図 昭和45年）